大学闘争の〈前夜祭〉としての役割を果たした大学祭変革団

1966(昭和41)年11月18日夜から翌19日朝にかけて、大阪市大の大学祭前夜祭として注目の大学祭変革団企画「暗夜の対話劇」が、予測された実力行使もなく、二時間ほど遅れて開催された。大和屋笠監督「裏切りの季節」で幕を開けた「暗夜の対話劇——頽廢者への鎮魂」は、19日午前零時頃よりいよいよ本番に入り、ハプニングでは詩人支路遺耕治と観客との間で活発なやりとりがつづき、その後、監督の足立正生を迎えて「鎖陰」が上映され、上映後足立は「フィルムを提供することでというので、私は自分のやりたいと思っていることをやった。当時人に観せるということは念頭になかった」と簡単な製作のあいさつをして、午前8時すぎ、「沈黙」のラスト・シーンとともに、同企画の全プログラムを終了した。

このように一応説明される大学祭の前夜祭に、私も友人と共に徹夜で参加していたが、詩人と観客との喧嘩腰の、お互いに挑発しあう激しい言葉の応酬や、訳のわからない映画よりも、最も印象的でもいまも鮮明に記憶に残っているのは、たぶん前夜祭も終盤に差し掛かって空も白んできた頃だったと思われるが、進行係の学生が紹介すると、「マロ! マロ!」の合唱が始まって登場した田宮高麿のアジテーションだった。騒音の中での演説であったため、聞き取りにくくよくわからなかったが、その名調子に聞き惚れたのがいまもありありと思い出される。壇上で威勢よく声を張り上げている男が大きく見えるほど、私の目にその熱弁は格好良く映った。その一年後、成田の三里塚闘争で出会うことがあったが、彼は意外に小柄であった。このアジテーションから三年半後に、田宮は「よど号」ハイジャックの日本赤軍リーダーとして北朝鮮へ飛び、その地で短い生涯を終えた。

学外参加者の私たちにはわからなかったが、前夜祭の騒然とした活況ぶりは学内参加者の積極的な支持によるものだけでなく、学内の反対者をも巻き込んで強引に行った意気込みに裏打ちされており、徹夜企画の主催者である「変革団」を名乗るグループの試みは大学祭の変革のみならず、大学そのものの変革の射程をも含んでいたことに、そのときは当事者も参加者も気付かず、その二、三年後に全世界規模で起こった大学闘争へ架橋されていく役割を果たすことになった。大学祭実行委、体育会などから不健全な企画として中止勧告が出ていたことに便乗した大学当局は、主催者の「大学祭変革団」の二人の学生を退学処分にしたが、二年後に全世界的な規模で噴出した〈大学闘争〉の先駆けであり、前兆ないし胎動として位置づける必要があるだろう。

この「変革団事件」については大阪市大新聞によると、実行委が変革団の徹夜企画を大学祭として認めない理由として、「①徹夜でやること、覚醒剤を使用すること(変革団はコーヒーの文学的比喩であると説明し、誤解を解くため撤回した)から不健全である、②徹夜の企画まで警備の責をまっとうできない、③翌日の企画に悪影響する」を挙げ、変革団と実行委の思想的対立は実行委が、変革団の徹夜ティーチ・イン企画を「不健康」として大学祭参加を認めなかったことから政治的対立に変わっていった。「大学祭は全員が自由に参加できるもので、実行委は学生の企画を実現させるもの、禁止する権限はない」とした変革団は「頽廢者への鎮魂」実行委を結成して、独自で学校当局と交渉、許可がおりなかったが、張間隆蔵君を責任者に強行開催を決定、団員一人をハンストに突入させた。

これに対し体育会は翼下のほとんどのサークル連名で中止勧告を出したのをはじめ、実行委、自治会中執と文化サークルに圧倒的な力をもっているセクトが強力に反対、企画の中の映画「裏切りの季節」「沈黙」等を取りあげ「酔っぱらった学生にエロ映画を見せて野獸的徹夜パーティをやる」といやらしい程の攻撃を加え、当日はこの企画を失敗させるため参加しようとする学生に約50名程で説得ピケをはった。このため一時開催不能かとも思われたが、11時頃には約4百人程が学内外から集まって予定通りの強行開催となった。ティーチ・インは、映画、アジテーション・ジャズ演奏、講演等が行なわれ、結局約2百人の参加の下で翌朝7時過ぎまで続けられた。学校当局は学生部委員がこれに付き添い再三中止を勧告し、そして二ヵ月後、当局は二人に退学処分を決定した。

大学祭変革団は、昨秋、マンネリ化した大学祭に批判的心情をもった学生たちが、これまでの大学祭に対し、新たな大学祭を創造しようとして結成された。問題になったのは、彼らが実行したさまざまな企画の中の暗夜の対話劇「頽廢者への鎮魂」というプログラムで、その企画は「市大学生および大学祭の矮小化され創造性の欠如した貧弱な感性を揺り動かし、もって、大学祭・前夜祭における不毛性を払拭するための痛棒を加える」とあった。このティーチ・インの講堂使用が大学当局から不許可となり、体育会、自治会、当局の反対する中を張間君らは強行した。大学祭の十月以上も前から構想がねられ、変革団は、自ら「白昼の頽廢から暗夜の自立へ」とテーマを設定、吉本隆明講演会や、前夜祭ティーチ・インなど、種々のプログラムを企画実行、吉本講演会では4百人もの学生が集まり、大学祭実行委のマンネリ化した活動と比して彼らの活動は注目を集め、一般には「白昼の頽廢から暗夜の自立へ」が大学祭テーマと思われる程だった。

去勢された大学祭に〈爆弾〉を一発投げ込んで、まずは自分自身と周囲との関係を変えなければ、我々はどこにも赴けないじゃないか、という雄叫びをあげようとしていたのが伝わってくる。この「変革団」の雄叫びが前夜祭の企画を通して、学生たちの鬱屈した心に伝染していったのだろう。「もう、たくさんだ」、思いの丈を吐き出す場を確保しようじゃないか、という声でつながっていた。「変革団」も参加した我々もどこまで意識していたかはわからないが、なにかが起ることに出会えそうな気がするワクワク感の底で〈占拠〉の感覚を共有していたと思う。単なる羽を伸ばせる物理的な空間として以上に、精神の非合法空間として躍動しようとしていたところが、「変革団」にとっても一般学生にとっても、〈楽しさ〉の尽きぬ根源であったのかもしれない。

退学処分理由は、「同人は、本学昭和41年度大学祭に際し、「大学祭変革団」を組織して、その中心となり大学の再三にわたる企画の中止もしくは変更の勧告にもかかわらず講堂を不法に占拠して大学内外の者を集め、大学の解散要求にも応ぜず、11月18日の深更より翌19日の朝に到る間、あえて集会を強行した。／これは、大学の秩序を著しく乱した極めて遺憾な行為であるのみならず同人は、現在においても、大学の禁止をあえて犯したことにいささかの改しゅんの情をも示さず、今後再びこの種の事件をひきおこす可能性がある」と判断される。」であったが、被処分者の張間隆蔵が自らに対する退学処分を断行した大学当局や、大学祭実行委員会に対してよりも、自らが所属した《大学当局の行政処分に対しほとんど無抵抗を呈した無頼派》と、「変革団」の弱点に充ちた背理性、非合理性により多くの内省的な批判を向けたように、処分撤回闘争は起こらなかった。

今から振り返れば、変革団が大学当局から退学処分を引きだしたという発想もみられなかったし、〈大学祭〉を退学処分を契機に改めて拡大し、深化せしめていくという構想もみられなかった。〈暗夜〉に大学に囲われた〈家畜〉たちの、やりたいこととやらねばならないことが遠くに引き裂かれていく思いを凝縮した〈花火〉が、一瞬上がっただけかのように見えたが、その年の6月にはビートルズが来日し、8月には中国で「文化大革命」が発動され、翌年の10～11月の羽田闘争では一人の学生が死亡するほどの身体の非合法闘争が激烈に展開された。変革団の行動は孤立無援の様相を呈して消滅していったかのようにであったが、必死に生きようとする者たちの底に流れる地下水道でつながっていたのだ。

変革団の意図にかかわらず、彼らの行動は二年後の大学闘争を先取りしていたし、イデオロギーやセクトに拘束されない行動のありかたは全共闘運動につながっていくものであった。変革団企画が強行された大学の一室は机や椅子によって構築されていないバリエーション空間の現出であったし、さながら〈解放区〉の混沌を呈していた。大学祭変革団であって大学変革団ではありえなかったけれども、大学闘争が永続的な〈祭〉の熱狂を孕んで展開されていたことを考えるなら、大阪市大で発生した変革団事件はその孤立した様相のうちに大学闘争における前史的な役割を果たしていたのである。大学闘争だけではない。変革団企画に中執として舞台上に登場してアジテーションを行っていた田宮高磨が三年半後に、「よど号事件」のリーダーとして北朝鮮へ飛び、おそらく変革団企画が行われていた前夜祭のどこかにいたであろう森恒夫が五年半後に、リーダーとして連合赤軍事件を惹き起こすに至った出来事につながりのなかでも、変革団事件をもう一度捉え直す必要があるかもしれない。